



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1980 精道教育促進協会(会長)三三・三四五二芦屋市船戸町12-6

教皇様の叡

司祭のすばらしい役割

五月四日・アフリカ、
キンシャサの司祭に。

初代教会を再現しよう！

活き活きとした共同体づくり

(…)いま頭に浮かんでくるたくさんのおうちきょうの話題にどれを選ばよいか迷いますが、話を始めるにあたっては使徒聖パウロのことが最適と思われます。パウロは自分が按手した弟子ティモテオに向って、按手によって与えられた神のたまものをふたたび燃えたせよ、そのときうけた恩寵を改めて自覚することによって、歩みを始めた道を堅忍のうちに前進せよと激励しています。神は恐れのお霊ではなく、ちからと愛と克己の霊を恵んでくださったからです。

仲介者としての司祭
イエズスはご自分の使命を果されましたが、

それは、おん父と完全にひとつであったから、おん父と一致を保っておられたからできたことなのです。おん父とのこのような一致を保っておられたからこそ、地上においてはまだ旅人の身でありながら、すでに至福直観を有する方であり、それに向けて人々を導いてくださったのです。キリストから受けた使命を効果的に果たすために司祭もまた、人々を導くべき目的地に、ある意味で、すでにいまから、到着していかねばなりません。そのためには、祈りに実りを与える聖書の研究から栄養をとりつつ、神の奥義を根気よく観想しなければならぬのです。個人的な祈りの時間とそのための手段を大切にすること、「教会の祈り」にもっと時間をさくとともに聖務をより寛大な心で果すこと、これらすべては司祭の聖化を助け、生ける神の神秘的、魅力的な現存を経験させてくれます。かくして、自分を取りまく周囲の環境に対して、力づくよく働きかけることができるようになるのです。

以上、司祭の本質にかかわる特質をごく簡単にえがいてみました。すべて教会の聖伝の伝えるところであります。したがって、きのうも今日もあしたにも、永久的な価値を有する点に触れたことになります。(…)

大切な仕事

私、教皇はみなさまの困難を知っております。果すべき司牧の仕事は多く、時間はいつになっても不足していること。しかし、信者はそれぞれ権利、その権利をもっています。十字架につけられたもうたキリスト、ゆるしを与えるキリストと個人的に出会う権利をもっているのです。私の初めての回勅「人類の救い主」で述べたように、「この権利は明らかに、キリストによってあがなわれた一人ひとりの人間に対するキリストの権利でもありません。だからこそ私はゆるしの秘跡において和解を与える仕事司祭の最も重要な役目であることを考えてくださるようお願いするのです。

さいごに、司祭に賦与された「霊的なちから(権能)」について考えてみましょう。この霊的な権能は、教会を建設するため、よき牧者にならって教会を導くために与えられました。謙虚で無私な信心を實行し、司祭の一致に必要な、たがいに相おきない合う種々の仕事や奉仕をよるこんではたす心構えをもち、司祭同志として司教との協力をつねに心がけるために司祭の権能は与えられているのです。信者の方々は司祭がしめす兄弟愛と一致の精神をみて、みずからが一致へと導かれます。司祭が役務を果すために行使する権能は、司祭にまかされている教会への司祭の忠実な生き方と密接につながっています。政治的な事柄については政治を司どる人々に任せてください。司祭にはほかの役目、すばらしい役目があり、それを果さなければなりません。司

祭は、政治的な意味とはちがった意味での指導者として、キリストの司祭職にあずかる役務者であります。司祭が干渉すべき広大な分野、それは信仰と道徳に関する分野であって、人々は信仰と道徳に関することからにおいてこそ、司祭の勇氣あることばと生活の模範による教えを待ち望んでいます。

信徒の役割

教会の構成員はそれぞれかけがえない役割をもっています。司祭の役割は、共同体に属する修道者やシスターや信徒が自分の役目を果せるよう助けることであります。なかでも、みなさまにとって大切な仕事は信徒の役割を發展させることなのです。洗礼と堅信によって、信徒は教会内で固有な責任を負うようになつたという事実を忘れてはなりません。それゆえ、みなさまが自らの責任を負いうる協力者養成に力を尽しておられることを高くかいたいと思う。司祭は、いかにすれば、たえず、直接的具体的な、また正確な願いを信徒に向けるべきかを知らねばなりません。信徒を教育して、信徒が自分たちのもっている隠れた宝に気づくよう助けなければならぬのです。最後に司祭は、独占的な態度をとって全てを一人じめにすることなく、信徒からだされるあらゆる種類のイニシアティブや決定に対して、協力できなければなりません。ただし、信徒の権限と責任のうちに含まれることからかきり積極的な協力を司祭が提供すべきことは明らかであります。このようにするならば、活き活きとした共同体が形づくられ、初代教会の姿が見事に再現されることでしょう。「キリスト・イエズスにおける協力者」(ローマ16・3)と聖パウロがあいさつに書くあの男女の協力者たちが、使徒のまわりをとりかこむ姿が浮かびあがってくると思うのです。(…)

キリストは仲介者としての役目を果されましたが、それはおもに、十字架上でみずから犠牲としてささげ、それをおん父がお受けになったからであります。十字架はいまも変わらず神と出会うために「必要な」道なのです。十字架は、第一の道としてまっさきに司祭が勇敢に歩むべき道です。ご聖体に関するわたしの書簡で思いだしていただいたように、聖体祭儀で司祭は、「キリストのペルソナ」において、十字架の犠牲をあらたにするようまねかれています。ではありませんか。アフリカの聖人アウグスチヌスは見事な表現を残してくれました。カルワリオのキリストは「司祭にして犠牲である。従ってキリストは司祭であつた。なぜならキリストは犠牲であつたから」と。(告白録十章43・69)司祭が徹底的にみずから無として神と教会と司教に従順をつくし、キリストとの一致のもとに、生涯を清いけいえとして御父にささげるなら、役務をはたすにあたり、死してよみがえりたも

うたキリストの恩寵がちから強く働くのを経験できることでしよう。

主イエズスは仲介者として、どの面からみても、神のため、そして兄弟たちのための人でありました。司祭もキリストと同じでなければなりません。だからこそ、司祭は全生涯を神と教会に献げる、しかもみずからの存在と能力、感情をことごとくささげるよう要求されているのです。

司祭は、独身生活を選ぶにあたり、人間への愛を捨て、神の愛をうけいれるべく自分をいわばあけ渡します。その結果、だれをも除外せず、かえって、だれをも愛徳のながれのなかに包みこみ神にみちびく神のたまものを受けて、すべての人々にみずから与えることができるようになります。司祭は、独身生活によって神と一致することができる。それゆえ、あらゆる種類の司牧に何の束縛をうけることなく挺身することができるとです。



剛毅の徳



ヨハネ・パウロ一世教皇が、教皇に選出された翌日、聖ペトロ大聖堂のロジアから語りかけられたとき、ほかのことども、あるひとつのことをおもいだされました。それは、八月二十六日のコンクラヴェ(教皇選挙)のときです。ご自分が教皇に選ばれるだろうことが、あらゆる事柄から推して、すでにはつきりしてきたとき、隣りにおられた枢機卿が耳元でささやきました。「勇気を出しなさい！」と。恐らくこれは、その時点でどうしても必要なことばだったので。お心に

枢要徳(下)

刻みこまれていた言葉だったのでしよう。翌日、すぐに思い出しておられるからです。

ヨハネ・パウロ一世は、このご自分のお話を、今わたくしが利用させていただいても、ゆるしてくださることでしよう。このお話は、ここにお話すわたくしたちすべてにとって、これからお話ししてゆこうとおもいますテーマの、よいきっかけとなるようにおもわれるからです。実のところきょうは、三つめの枢要徳、剛毅について、お話ししたいとおもうのです。勇敢であれとひとに説くときは、まさにこの徳のことを語っているのです。それは、コンクラヴェでヨハネ・パウロ一世のとな

りにおられた枢機卿が「勇気を」といって励まされたときにも、かわりありません。

どのような人を、つよい、勇気あるひとといっているのでしょうか。ふつうおもういかべるのは、祖国を守ろうと、危険に身をさらし、戦のときには命さえもさしだす兵士のことです。しかし、平和のときにも剛毅が必要であることは、あきらかです。だからこそ、軍人ならぬ「市民としての勇気」で抜きん出ている人びとを、おおいに尊敬するのです。剛毅がどういふものかを示してくれるのは、溺れかけているひとを救うためにみづからの生命をかえりみないひと、火事とか洪水とかの災害に援助の手をさしのべてくれる人びとでしょう。聖カルロスは、わたくしの保護の聖人でありますが、この徳に関してたしかに秀でたかたでした。ペストにおかされたミラノにあって、市民たちに対する司祭としての聖なる務めを、最後まで果していかれたのです。しかしまたわたくしたちは、エヴェレスト登頂に成功した人々やはじめて月に足を踏み入れた人々をも、賞め讃えずにはいられません。

こうしたことすべてからわかるように、剛毅という徳のあらわれかたには、かぎりがないのです。人にもよく知られ、名声を博するようなあらわれかたもあるでしょう。それほど知られることはないけれど、徳としてはいっそうすぐれてさえる場合もあります。じつさいには、はじめに述べましたように、剛毅とは力をもった徳であり、枢要徳のひとつなのです。いくつか、例を挙げましょう。一般的にはそう人目をひくものではないかも知れません。しかし、偉大な、ときには英雄的できさえる徳が見うけられるのです。どうか目を向けてくださいますように。

たとえば、ある女性がいいます。すでにたくさんの子どもをかかえた母親です。その胎内にあたらしいいのちが宿りました。大勢のひとが、妊娠中絶の「手術」を受けてその子の

いのちを消してしまおうようにと「忠告」します。婦人は断固として拒否します。この拒否がもたらすあらゆる困難は、よくわかつているのです。自分にとって、夫にとっても、家族ぜんぶにとっても、困難が生じます。それでもなお、この母親はそんな「忠告」を断固として拒否するのです。そんな困難に負けてなぞいられない。それほどおおきな価値、聖なる「価値」が、自分の宿したあたらしい人間のいのちに、そなわっていると思ふからです。

もうひとつの例を挙げましょう。あるひとがいて、自由とそれにくわえて安楽な生活をも保証しようといわれたのです。ただしそのためには、自分の主義主張を否定するか、みずからの信念に照らせば他のひとに誠実とはいえないことを、認めねばならないのです。脅迫と誘惑とで両面から攻められたりながら、このひととまた、その申し出を拒否するでしょう。勇気のあるひとです！

新聞には何も書かれず、ひとに知られることがほとんどなくとも、剛毅は、いたるところで、しばしば英雄的な行いに発揮されています。人間の良心、そして神だけがそれに気づくのです。こうした無名の勇気ある人びとすべてに、讃嘆のことばをささげたいとおもいます。拒否し、あるいは承諾したがために、その代価を払わされ、それでもなお、そうする勇気をもっていった人びと、人間の尊厳と奥深さとを、なみなみならぬしかたで証明した人びとすべて。知られていないからこそ、そのすぐれたふるまいを、とくに賞讃されるねうちのある人びとなのですから。

聖トマス教皇によれば、剛毅の徳は次のようなひとのうちに見られるものです。

— 危険に立ち向かう覚悟ができていひと。

— 正しい理由、真理、正義などのために、逆境を耐え忍ぶ覚悟ができていひと。

— 人間としての弱さ、ことに恐怖心を、なんらかのしかたで克服すること、それが剛毅の

徳のためにはいつも必要です。じっさいのところ、人間というものは本来、危険とか身の不幸や苦痛をおそれてあたりまえなのです。そうしてみれば、勇気に富んだ人びとは、戦場だけではなく、病室にも、病いの床にもいるものなのだ、と考えねばなりません。勇敢な人びとは、強制収容所や強制退去者の収容地で、たくさん見ることができました。ほんとうの英雄たちでした。

市民としての勇気にあふれた人びとでも、脅迫や圧制、迫害が日常的な風潮のなかで暮らしていると、恐怖心のせいで、時には勇気をうしなってしまう。恐怖心の壁を、いわば、のり越え、真理と正義の証人になるというひとこそ、特別な価値をもつにいたるのです。それほどの剛毅をわがものとするには、みづからの限界をある意味で「踏みやぶり」、自分を「超越」していかねばなりません。どうなるかわからないという「危険」に踏みこまねばなりません。不興をまねく危険に踏みこまねばなりません。おもしろくない結果を身にひきつけ、軽蔑、侮辱、物質面での損失、おそらくは収監、迫害まで甘んじて受けねばならぬ危険かも知れません。この剛毅を得るためには、身を賭しても守らんとする真理と善を、深く愛する心がなければなりません。

剛毅の徳は、自分を犠牲にする能力と、きつてもきれぬ間柄にあります。この徳については、すでに古代の人びとも、非常に明瞭な定義を抱いていました。それが、キリストによって、福音的、キリスト教的な輪郭をあたえられたのです。福音は、弱いひと、貧しいひと、柔和なひと、謙遜なひと、平和のためにはたらくひと、あわれみのあるひとにむかって述べられています。しかし、同じように、剛毅への勧めもたえず語られているのです。(マテオ14・27)福音の教えによって人間は、正しい理由、真理、正義のためには、「命を与え」(ヨハネ15・13)ねばならぬということをし

知るのです。

ここで、さらにもうひとつの例を挙げたいとおもいます。それは四百年もまえのことではありますが、今でも生き生きとしており、現代とも深い関係があるとおもいます。若い人びとの守護の聖人、聖スタニスラオ・コスタカのことです。お墓はいまも、ローマのサン・タンドレア・アル・クイリナーレ教会にあります。聖人はじっさいにそこで十八年の生を終えられたのでした。がんらいたいへん繊細で優しいかたでしたが、どうじにとても勇気のあるかたでした。剛毅だったればこそ、高貴なお生まれにもかかわらず、貧しくあることをお選びになり、キリストの模範になられて、キリストのみに仕えることにしたのです。周囲ではその決心に頑強に反対したのですが、おおきな愛と、さらには挫けぬつよさとをもって、かれの座右のことばに含まれている決意をたくみに実現されたのです。かれが座右におかれたことばはこうでした。アド・マイヨラ・ナートゥス・スム(わが生は常にいっそう偉大なるもののために)。イエズス会の修院寮にたどりつかれたときも、ウィーンからローマまで徒歩で旅されたのですし、しかもそれは、この「頑固な」若者の決意を力づくでひるがえさせたいと願う追跡の手を、なんとかまぬがれようと努力をかさねてのことでした。

十一月には、ローマじゅうから多くの若い人びとが、ことに学生、生徒、修練士が、サン・タンドレア教会にある聖スタニスラオの墓をおとすれます。わたくしもその人たちとこのころを同じくしています。なぜならわたしたちの時代もまた、聖なる「頑固さ」で、「アド・マイヨラ・ナートゥス・スム」とくりかえしいえるひとを、必要としているからです。つよいひとが必要なのです。人間として在るためには、剛毅であらねばなりません。じっさい、ほんとうに賢明なひ

とになるには、剛毅の徳を身につけていなければなりません。ほんとうに正義のひととは剛毅の徳をもっているひとのことではかないのと、ちょうど同じことです。

「剛毅のたまもの」とよばれる御恵みを聖霊に祈りもたえましょう。真理、正義、召し出し、結婚生活での誠実など、価値のいっそうたいかものにおいて自分を「超越してゆく」つよさが欠けている場合でも、剛毅とよばれるこの「天の恵み」が与えられれば、わたくしたちひとりひとり、強い人間となれるはずです。そして、もっとも必要なそのときに、心の奥で「天の恵み」の声をきくことができるとでしょう。「勇気をおだしなさい」と。

節制の徳



徳について語るときは——こうした概要徳だけでなく、すべての徳、あらゆる徳について語るときは、常にあたまたまのなかで、実際の人間、現実の人間を、おもひえがいていなければなりません。徳は、生活から切りはなされた抽象的なものではなく、むしろ、生活そのもののなかに深く「根」を張っており、生活からあふれでて、生活をつくりあげているのです。徳は人間の生活・活動・ふるまいに、つよい影響をおよぼしています。したがって、今こうして考察をすすめていますときに、徳について語っているというよりは、徳をもっているというべきでしょう。わたしたちが語っているのは、賢明なひと、正義のひと、剛毅なひとといった人間のことなのです。そして最後にきょうは、「節制のきいた(節度のある)」ひとについて、お話ししましょう。

すぐにいいたいとおきたいのですが、ひとつひとつの概要徳に由来するこうした内容、というか人間の態度はみな、たがいにつながっています。ですから、真に賢明なひと、ま

さしく正義のひと、ほんとうに剛毅なひとが、節制の徳をも身につけないで、そうなることなぞありえませんが、節制の徳はほかのすべての徳が成り立つための間接的な条件だともいえましよう。しかしまた、「節制できる(節度のある)」ひとになるには、他のすべての徳が欠かせない、ともいわねばならないでしょう。

「節制」ということは自体、ある意味では、「人間の外」にあるものをさし示しているようにおもえます。じっさい、節制のきいたひとというのは、飲食や快楽にきたなくないひと、酒をすぎさぬひと、菓の使用で意識を朦朧とさせたりしないひとなどをいいます。しかし、人間の外にあるこういった要素の原因は人間の内部にあるのです。つまり、人間の内部では、あたかも「高級な自分」と「低級な自分」とが存在している感じではす。「低級な自分」とは、肉体とそこに属するすべてのもの、つまり肉体的な必要、欲望、ことに感覚的なものへの情欲のあらわれです。節制の徳があれば、すべてのひとは、この「低級な自分」を「高級な自分」によって支配することができるといふ。これは肉体の蔑視でしょうか。肉体の無能力をさらけ出すことでしょうか。とんでもありません。このように支配してこそ、肉体にもっとたかい価値をあたえることができるのです。節制の徳を身につけてはじめて、人間であるための条件のなかで、肉体と感覚とにふさわしい正しい位置を、見つけることができるのです。

節制のきいたひとは、自分が自分の主人であるようなひとのことです。情熱が、理性、意志、「ころ」にさえ打ち勝つことのないひとです。自分を制御できるひとです。そうである以上、なんと基本的に根本的な価値が節制の徳にはそなわっていることか、ただちにわかるでしょう。人間が完全に人間であるために、なくてはならぬものでさえあります。これがわかるには、情熱に押し流されてしま

家庭と家族

あなたの家庭を教会に

一九七九年十二月三日・教皇様が初めてローマ
教区の教会を訪問されたとき、ガルバツセラの
聖フランシスコ・ハビエル教会で。

ったひと、アルコールや麻薬の常習者をみればいいでしょう。情欲の「いけにえ」になりはて、理性をもちいることをみずから放棄してしまうのです。「人間として在る」とは、自分の尊厳を大切にすること、それゆえ、なにもまして、節制の徳に導かれた生活をすゝる、ということなのです。このことをはつきりと考えれば、節制の徳の大事さを知るには充分でしょう。

できるためには、たとえば異性ととの関係をおもひやかべてもいいのですが、自分じしんと「低級な自分」のために設けている正しい限界を、越えてはならないのです。この正しい限界を尊重しなければ、自分を自由にあやつることはできません。だからといって、徳のある、節度をたもつひとは「自然のまま」ではいられない、たのしんだり泣いたり感情をあらわにしたりできない、というのではありません。つまり、木石でできているかのように、鈍感で「無関心」でなければならぬ、というのではないのです。まったくちがいます。

得心がいくには、イエズスを「ごらんになればいいでしょう。キリスト教の道徳が、ストア派の禁欲的な道徳と同じに見られたことはいちどもありません。逆なのです。どのひともみな、ものを受けいれるころとはげしく動いていくころという宝物をもっています。ひとりひとりちがっています。それぞれ、男と女とでもちがいます。女性は女性なりの感受性をもっています。このことを考えれば、おわかりでしょう。たえず自己にはたらきかけ全行動に特別な「警戒の目」を光らせないかぎり、ころが円熟した花を自然にひらか

せることなどありえないのです。そしてじつに、こうした努力こそ「節制」の徳、「節度」の徳の中味なのです。
わたくしはまた、この徳を身につけるためには、それぞれがある特殊な謙遜の態度をもたねばならぬ、ともおもいます。それは、人間の本性に神が恵みたまうた贈り物についての謙遜です。「肉体の謙遜」と「こころの謙遜」のことです。謙遜は人間の内的な「調和」のために必要な条件です。人間の「内面」の美のために必要な条件です。どうかこれに注意深く考えてください。ことに若いひとたち、さらには、若い女性たちに考えてほしいのです。ほかのひとに気に入られたいために、美しくなりたいと必死に願う年ごろだからです。人間は何よりもまず内的に美しくなければいけないということを、おもいだしました。内面の美しさが欠けていけば、肉体の美しさだけのためにどれほど努力したところで、ほんとうに美しいひとにはなれません。

(…)なかならずだれを、わたくしはおもひ、だれに対して語りかけましょうか。それは、この教区に暮らすすべての家族、ローマの教会の一部をなすすべての家庭にむけてです。ローマ教区を形づくる小教区をおとずれるとすれば、そのすべての「家庭教会」にまでいたらねばなりません。すなわち、すべての家庭にまでです。じつに、この名は、教会の神父たちが家庭に冠したものであるのです。「あなたの家を教会とせよ。」聖ヨハネ・クリゾストモ

かで、全家庭をおとずれます。たしかに沢山の家庭はいま、ここにいます。そうした家庭に、ここからご挨拶もうしましょう。しかし、おもひとこのころをもちいて、わたくしはすべての家庭をたずねるのです。
結婚されているおふたりに、親となられた方たちみなに、言います。結婚の日のように、婚姻の秘跡を受けたときのよろこびを思い、たがいの手をとりなさい。きょうふたび、あなたがたの司教が、結婚の同意をとめ、あのとときと同じように、婚姻の約束のことば、結婚の誓いを口に出すよう、もともとめられているのだとおもってください。

なせだか、わかりますか。こうした誓約を守るかどうか、「家庭教会」が、家庭の質と聖性が、その子どもの教育が、かかっているからです。愛すべきおふたりよ、こういうすべてをキリストはあなたたちにゆだねたのです。その日、キリストは、司祭による司式を

この主題について徹底して述べつくしたというより、語りつづけねばならぬのを打ち止めにしているというよりは、よく承知しています。おそらく、ふたたびこの主題に立ちもどる機会が、いつか、あるだろうとおもいます。

家がある説教で信徒たちに勧めました。次の日にもくりかえしました。「あなたの家を教会にせよと、きのうわたしがいうと、あなたがたは歓喜の声をあげ、このことばを聞いてどれほどの喜びが胸を満たしたか、雄弁にしめ

守るかどうか、「家庭教会」が、家庭の質と聖性が、その子どもの教育が、かかっているからです。愛すべきおふたりよ、こういうすべてをキリストはあなたたちにゆだねたのです。その日、キリストは、司祭による司式を

らすひとでありなさい。こんにちほどキリストが必要とされたことはないのです。すべてのひとに、あなたの生活と生命とをもって、はっきりと告げ知らせなさい。キリストだけが人類の真の救いである、と。

「現代世界憲章」52)「教会憲章」35と41、さて、いま、わたくしはまた、あなたがた、子どもたちと、若者たちのことをかんがえています。教皇はあなたたちに特別な愛情をいだいているのです。教会の将来の象徴だからだけではなく、将来の教会そのもの、したがって将来の教区そのものだからです。このころの底からイエズスの友でありなさい。家庭で学校で、教区で、澄みきって快活なキリスト者の生活のよい手本をしめしなさい。いつも、若々しいキリスト信者でありなさい。いつも、キリストのおしえの真の証人でありなさい。じつに、この混乱した社会にキリストをもた

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月二十五日発行 定価 一部六十円送料五十円 半年分予約三百六十円送料三百六十円 一年分予約七百二十円送料六百円 (一部の送料で三部送付可) 二十部以上一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 072393